

“後藤龍伸さんの シェエラザード”

以前、本誌の連載「カメレオン遁走記」で執筆していただいたヴァイオリニストの後藤龍伸さんが、指揮者の三石精一さんのたつての希望で東京ユニバーサルフィルハーモニー管弦楽団の第23回定期で、ゲスト・コンサートマスターとして登場。シェエラザード他を演奏する。民族音楽に造詣の深い後藤さんに、お話をうかがった。



—三石さんにはどのような印象をもつておられますか？

「三石先生とはもう二十年以上一緒にさせていただいております。職人としてもっとも尊敬申し上げる指揮者の一人です。音楽家としての音楽に対する愛情や情熱、そしてそのあたたかいお人柄に、魅了されずにはいられません。

いつも私たち後輩に、はかりしれないほどたくさんの音楽的財産を与えてくださる方です。」

—東京では演奏をすつとされていなくなつたようですが、久し振りに演奏するにあつて今どのような心境ですか？

「まだ行ったことありませんが、北朝鮮に行くぐらいの緊張です。砂漠かジャングルにおくられるような感じでしょうか(笑)。」

—シェエラザードのソロに關してですが、どのような演奏をしたいと思われていますか？

「作品としては大変見事で、構成から色彩まで、リムスキー＝コルサコフの魅力が、あまふることなく表現されている曲です。ヴァイオリンのソロも効果的で、曲の雰囲気にとりあつていきます。」

できれば、自分でない、ほかの素晴らしいヴァイオリニストで聴きたい曲です(笑)。」

—民族音楽に大変造詣の深い後藤さんとしては、民族音楽からの影響もあるのでしょうか？

「リムスキー＝コルサコフの民族音楽の感触は、どちらかといえは知識からくるものより感性にうつつたえる要素が多いように思えます。」

いい意味でのハリウッド製のオリエンタリズム(私自身が結構そういうものが好きなので)というか、一般の人々がイメージをつかみやすい中近東や一夜物語を、映画のサウンドトラックのように表現していると思います。

実際の音楽的要素は、あくまでモーツァルトやベートーヴェンの延長線上にあり、(ストラヴィンスキーやドビュッシーにみられるような)西洋からの逸脱は考えられないでしょう。」

—今、ストリングでは音律(平均律、ピタゴラス音律、純正律など)や旋法などを頻りにテーマとして取り扱っていますが、シェエラザードでは、そのような音律、旋法を意識されるのでしょうか？

「いつも音律に関する記事、大変興味深く、楽しく読ませていただいています。この問題は、あまりに深すぎて、とても今の段階ではお話しできません。」

現場では、とにかく「耳を研ぎ澄まして演奏します」、とだけ申し上げておきましょう。」

—このコンサートで聴衆に特に伝えたいことは？

「このコンサートの魅力は、どちらかと言えば、こう言つてはなんですが、交響曲のほうに面白くないではないでしょう。リムスキー＝コルサコフの初期の作品ですが、演奏会でとりあげられる事が少ないのが残念です。カリンニコフのように(笑)、いつかこの『アンタール』が日本全国のあちこちで、アマチュア・オーケストラで取り上げられるかもしれません。」

あと最後になつてしまいました、本当に人間的にも音楽的にも素晴らしい世界的なピアニスト小川典子さんと、これまた楽しいプロコフィエフの協奏曲を共演させていただけるのが、何よりの喜びであること、この場をお借りいたしまして読者のみなさんにお伝えしたいと思つています。どうも有り難うございました。」

東京ユニバーサル
フィルハーモニー管弦楽団
第23回定期演奏会
2008年4月26日14時
東京芸術劇場大ホール
指揮：三石精一
Pf.小川典子
曲目：リムスキー＝コル
サコフ/交響曲第2番『アン
タール』1897年度版、協奏
曲第3番、リムスキー＝コル
サコフ/交響組曲『シェエ
ラザード』、詳細は03-
3974-6557(ユニフィ
ケットセンター)

